

中国近現代政治・思想史研究——研究目的をめぐる方法論の変遷

東京大学：中村元哉

報告趣旨——研究目的をめぐる研究方法

①政治・思想史：改革にかかわる政治思想史／現実の政治と連関する思想史

①日米の漠然とした違い

・日本：戦前～戦後に様々な方法論に基づく様々な中国認識が提示されてきたにもかかわらず、一般社会の中国認識を支える「根幹」部分（近代の評価基準としての中国）は変わっていない？→中国を客観的＝実証主義に基づいて解明したいという欲求→しかし、それを何の為におこなっているのか？【how から why へ】

* 1990年代以降の人的交流の拡大と史料の公開→中国・東アジア圏では共有可能

・アメリカ：地域研究としての中国研究→歴史学に根ざした中国研究とは？→歴史学の新しい方法論を試行錯誤する場としての中国研究（ex. GIS（地理学）の活用／デジタル化された史料のコンピューター解析／統計学の活用……）→歴史学の新しい方法論を構築したいという欲求【why から how へ】

* 実証研究もある

ex. Xiaowei Zheng, *The Politics of Rights and The 1911 Revolution in China*, Stanford: Stanford University Press, 2018

②1970年代以降に生まれた日本の中国近現代政治・思想史研究者が直面する二重苦

・（政治や思想信条に翻弄されたくないはよしとして）日本でなぜ研究しないといけない？

・アメリカの新しい方法論に対する違和感をどう説得的に説明できるのか？

* AI がやればいいのか？＝魂のない研究では？

③この二重苦に対する暫定的回答（方法論）とそれへの批判——実は三重苦???

・中国の不自由な学術環境→解明しきれていない政治・思想史を実証的に解明するほかない

・しかし、単なる実証研究では日本では無意味？ また、固有性・特殊性の探求は東アジアの学術交流ではとても有意義だと思うが、一般社会にはなかなか理解してもらえない？（→中国の伝統や内在論理を政治活用しようとする中国共産党の存在）

・社会科学と共通する概念や枠組みを設定して、社会科学とも対話可能な実証研究をすすめるしかないのでは？→しかし、普遍性を自明視するかのようこの方法論は、グローバル化時代とはいえ、本当に成立するのか？かりに普遍性がみつかったとしても、その普遍性が正しいと言い切れる根拠はどこにあるのか？

私の研究分野は、以上のような方法論をめぐる三重苦を抱えている……悶絶中……

[参考：日本の中国近現代史研究の主要な動向]

中村元哉（2019）「日本の中華民国史研究——何を目ざしているのか？」（川島真ほか編『中華民国史研究の動向——中国と日本の中国近代史理解』晃洋書房）

一、中国近現代政治・思想史研究の軌跡

①1970年代以前

1) 20世紀以降の中国史≠歴史

2) 20世紀以降の中国史＝革命中心史観・中国共産党中心史観

★戦前の反省＋冷戦下のイデオロギー対立＋史資料の不足→それぞれの理想を主張するための中国研究（日本批判を含む）

②1980年代～1990年代 cf. 天児報告

〔前提〕

西洋近代、中国革命などの正解が存在した時代（～1970年代）から絶対的基準の崩壊と相対化がすすんだ時代（1980年代～1990年代）へ

1) 民国史・国民党史研究の進展

・山田辰雄（1980）『中国国民党左派の研究』慶應通信、『近きに在りて』（1981-2011）、野澤豊編（1981）『中国の幣制改革と国際関係』東京大学出版会……など

＊戦前の同時代的分析も一部活用：満鉄調査、新聞・雑誌の影印版

2) 内在的な中国理解の深化

・溝口雄三（1989）『方法としての中国』東京大学出版会、溝口雄三ほか編（1993-1994）『アジアから考える』（全7巻）東京大学出版会、溝口雄三（1995）『中国の公と私』研文出版、溝口雄三ほか（1995）『中国という視座』平凡社、横山宏章（1997）『中華民国——賢人支配の善政主義』中央公論社……など

＊費孝通「差序格局」論（1947）

＊ポール A. コーエン（1988）『知の帝国主義——オリエンタリズムと中国像』平凡社

＊戦前の系譜：島田虔次（1987）『新儒家哲学について——熊十力の哲学』同朋舎、増淵龍夫（1983）『歴史家の同時代史的考察について』岩波書店……など

＊溝口雄三（2004）『中国の衝撃』東京大学出版会など今世紀以降もあり

3) 実証主義の深化

・川島真（民国期档案／1990年代前半）、久保亨（1999）『戦間期中国「自立への模索」——関税通貨政策と経済発展』東京大学出版会……など

4) 現代中国論との接続

・毛里和子・天児慧ほか編（2000-2001）『現代中国の構造変動』（全8巻）東京大学出版会

★中国近現代史の内在的展開をふまえた中国研究＋グローバルヒストリーのなかの中国研究の萌芽

二、中国近現代政治・思想史研究の現在

①2000年代～2010年代

〔前提〕

中国の学術環境の変化：不十分ながらも史料公開／留学生の増加／中国のグローバル化
→1990年代までの日本の中国研究の「強み」は維持できるのか？

→中国の固有性・特殊性はどこまで固有で特殊なのか？

ex. 儒教とキリスト教の仁愛／尊厳概念

1) 20 世紀中国史（民国史＋人民共和国史＋台湾・香港史）の開拓

・横山宏章ほか編（2002）『周辺から見た 20 世紀中国——日・韓・台・港・中の対話』中国書店、飯島渉ほか編（2009）『シリーズ 20 世紀中国史』（全 4 巻）東京大学出版会、中村元哉（2018）『中国、香港、台湾におけるリベラリズムの系譜』有志舎……など

2) 国際政治・国際秩序と関連づけた中国理解の深化 cf. 川島報告

・川島真（2004）『中国近代外交の形成』名古屋大学出版会、本野英一（2004）『伝統中国商業秩序の崩壊——不平等条約体制と「英語を話す中国人」』名古屋大学出版会、岡本隆司（2006）『属国と自主のあいだ——近代清韓関係と東アジアの命運』名古屋大学出版会……など→近代をめぐる正負両論：坂元ひろ子（2004）『中国民族主義の神話——人種・身体・ジェンダー』岩波書店、水羽信男（2007）『中国近代のリベラリズム』東方書店、村田雄二郎編（2012）『リベラリズムの中国』有志舎……など

3) 実証主義の選択と独自性

・狭間直樹編（1999）『梁啓超——西洋近代思想受容と明治日本』みすず書房、笹川裕史ほか（2007）『銃後の中国社会——日中戦争下の総動員と農村』岩波書店……など

* 中華ナショナリズム：満洲史研究や汪精衛研究

* 中台関係史・国共関係史・華僑史：第三勢力（「民主党派」）→中国国民党革命委員会

4) 社会科学への広がりや射程に入れた現代中国論の模索

・小浜正子（2000）『近代上海の公共性と国家』研文出版、吉澤誠一郎（2002）『天津の近代——清末都市における政治文化と社会統合』名古屋大学出版会、吉澤誠一郎（2003）『愛国主義の創成——ナショナリズムから近代中国をみる』岩波書店、中村元哉（2017）『対立と共存の日中関係史——共和国としての中国』講談社……など

★グローバルヒストリーとしての中国研究、実証主義を取捨選択しながら、固有性・特殊性・普遍性を往復する中国地域研究

②一つの事例——中国憲政史研究

深町英夫編（2015）『中国議会 100 年史——誰が誰を代表してきたのか』東京大学出版会

中村元哉編（2018）『憲政から見た現代中国』東京大学出版会

金子肇（2019）『近代中国の国会と憲政』有志舎

1) 中国における憲政の意味×、立憲主義 or 民主主義に基づく憲政が実現してきたか否か×

2) 近現代中国において重要な政治課題の一つ：民国（軍政→訓政→憲政）、人民共和国（社会主義憲法下の憲政）

3) 日本で展開可能な研究領域の一つ * ナショナリズム、民族問題……など

4) 台湾や香港も射程に収められる研究領域の一つ

5) 戦前から戦後にかけての日本の研究遺産を活用できる研究領域の一つ

・宮澤俊義ほか（1936）『中華民国憲法確定草案』中華民国法制研究会

・興亜院政務部編（1942）『中華民国憲法草案初稿意見書摘要彙編』興亜院政務部

- ・外務省調査局第5課編印（1948）『戦後における中国政治』

この憲法〔中華民国憲法〕が民主化していることは、国家形態に関する原則で民主主義を強調し、人民の基本的人権の保障で憲法直接の絶対的保障の立場をとり、相当の専制独裁への途を封じ、地方の自治を強調した点で明らかである〔同 39 頁〕。

- ・石川忠雄（1953）『中国憲法史』慶應通信

- ・平野義太郎（1956）『人民民主主義憲法への史的展開——ワイマル憲法の崩壊から新中国憲法の成立まで』日本評論新社

6) 関連史料の公開

7) 社会科学との対話を模索できる研究領域の一つ

- ・前掲中村「日本の中華民国史研究——何を目ざしているのか？」

近現代中国は立憲主義からすれば高く評価されることはないだろうが、たとえ共産党が憲法や法の上位にあつてそれらを勝手に書き換えていたとしても、それが人民の意思に基づいておこなわれていると説明される限りにおいて、フランス革命以来のさまざまなバリエーションをもつ民主主義と何がどのように異なるのかを考えてみることは必要なだろう。このような問いは、立憲主義と民主主義をめぐる普遍的課題へと自ずと跳ね返っていくはずである。

- * 「社会主義民主」とは？（ソ連政治を研究対象とする政治学者も未解明では？）

③直面している課題と方向性

- ・三重苦への対応：二つの課題（←実証研究の日本での意味+アメリカの方法論）に応える為の方法論の実践→普遍性をめぐる批判→しかし中国からも問える普遍的課題* 尊厳概念

- ・さらに前進する為に

→1940年代の一部の思索と同質???

等しく人間生活の展開である限り、ヨーロッパだと中国だとを問わず、そこには畢竟して同じような傾向が現れるであろうし、学問が人間理智の認識であるかぎり、それが法則的類型的なものを取りあげることが、事柄の自然に属するであろう。中国の近世といえども、人間史の「近世」に例外ではあり得ないと信ぜらるるのである。然も同時にわれわれはまた、そのあくまで中国的な性格を追求しなければならない（島田虔次（1970）『中国における近代思惟の挫折』筑摩書房）。

宋以後の中国とルネサンス期以後のヨーロッパには同様な現象あり／それを追究することで中国史の普遍性と特殊性とが明白になるはず。

→従来の伝統理解（←近代の絶対性を批判する伝統や内在理論を重視する方法論は、実は理念化された近代のアンチとして構想されているに過ぎない）を結局は乗り越えられていない？（茂木敏夫（2017）「中国的秩序の理念——その特徴と近現代における問題化」島根県立大学北東アジア研究センター『北東アジア研究』別冊第3号）

→実証研究の基盤が急速に揺らいでいるのでは…… * 京大人文研・東洋文庫など